

俳句 大津俳句会

たつぷりと代田^{しろた}へ水の急ぎをり

井芹眞一郎

代田^{しろた}搔^かく農夫のあとに驚^{きど}一羽

井上 昭子

立葵^{たちあおい}空の彼方^{かなた}を目指しをり

岩崎由美子

雨弾^{はじ}く紫陽花^{あじさい}の穂^ほ生^まき生^まきと

岡崎 浩子

山の端^はを淡^{あわ}く出^いでたる夏の月

佐賀 久子

紫陽花^{あじさい}の穂^ほのはづみて雨しとど

佐澤 俊子

俳句 つのはな句会

雲の峰少女無心に船描く

上杉 波

余花の風錆びた記憶を揺り起こす

矢嶋 道子

緊張ほどく 山芍薬の花咲きはじむ

梅木トキエ

夏座敷母の日の花香りたり

塚本 洋子

戦争を観ている玉葱切りながら

柴田しのぶ

冒険よりひとり帰る児 麦の秋

村田 健二

非通知メール毛虫駆除すること削除

志賀 孝子

白樺の見える坂道濃紫陽花

田上 公代

店灯に昭和のにおい露地の夏

木庭 杏子

短歌 大津短歌会・野づかさ

大阿蘇の嶺に白雲立ちのぼる雨後のあおぞら恋うるがごとく

吉永 恵子

黒人を穴のあくほど見つめてた歪な地球をしらざりし頃

坂本 果子

春の雨あがりて溜る水すこし水無川に細波のたつ

鞍 岳志

ユーチューブ見て掬えし夕餉の菜夫の一口目じつと見つめる

山本 泰子

病癒え動けることによろこびて伸びたつ草をわが踏みあるく

吉田 良子

ちゃん付けで名を呼び合えばたちまちに一五の我ら白髪なれども

荒木 麗子

透きとおるひばりの声よ麦の穂のそよぐ畑にさえずりひびく

田中 玲子

崩壊の家に残されたる猫か地割れの道をとぼとぼ歩く

豊岡ミツル

店仕舞い決断したる古書店の二階カフェにしばらく坐る

小平 善行